

全員でつくり上げる学級活動で 居心地の良い学校をつくる

福岡県 宗像市立玄海東小学校

かつては授業が成立しない学級があるなど「荒れ」が目立った宗像市立玄海東小学校。学級内で話し合って決めたことは全員で実践するという「学級活動」を継続するうちに、子どもは学級の中で自分の役割を見いだし、居場所を見付け、落ち着きを取り戻していった。今では、異学年の交流や地域行事の参加など、縦横につながるを広げている。

取り組みのねらい

- 子どもが安心して学習に取り組めるような学級をつくる
- 子ども相互の関係をより良いものにする
- 地域と共に子どもを育てる関係を育む

取り組みの内容

- あいさつをはじめ、基本的な習慣や決まりを守る姿勢を身に付ける
- 学級活動を通し、友だちと力を合わせて問題に取り組む経験を積む
- 異学年の子どもや地域と交流し、さまざまな人々とのつながりを実感する

取り組みの成果

- 子どもが落ち着きを取り戻し、学習にきちんと取り組めるようになった
- 子ども同士の人間関係が良好になった
- 人のために何かをしたいという意識が芽生え、自発的な行動が出来るようになった
- 生活面の課題が解消したことを受け、学力向上の取り組みをスタートした

取り組みのねらい

学校を楽しい場所にするために
一から学校づくりに取り組む

2009年度、脇田哲郎校長が宗像市立玄海東小学校に赴任した当時、校内は「荒れ」が目立つ状態だった。私語や立ち歩きで授業が成立しない学級があったほか、人間関係をうまく築くことが出来ない子どももいて、教室が安心して学べる環境ではなかったと、脇田校長は振り返る。

「本校は、漁業関係者が多い地域と、農業関係者が多い地域の2つのコミュニティで構成されます。子どもは自然の中で育つこと

S c h o o l D a t a

◎1972(昭和47)年、池野小学校と岬小学校の統合により開校。学区には福岡県有数の水揚げを誇る鐘崎漁港がある。宗像市研究指定校として小中一貫教育の研究にも取り組む。



校長 脇田哲郎先生

児童数 150人 学級数 7学級(うち特別支援学級1)

所在地 〒811-3514 福岡県宗像市田野1382

TEL 0940-62-2500

URL <http://munakata-edu.jp/genhsyo/>

公開研究会 未定

*プロフィールは2014年3月時点のものです

学びに向かう土台を築く学級づくり

もあり、非常に元気で素直です。しかし、指導の際に少しでも気を抜くと、楽な方向に流れてしまう傾向がありました」

当時は地域の人々から学校に苦情が寄せられることも多く、地域との関係は良好とはいえないものだった。更に、宗像市が実施する子どもへの意識調査では、「学校は楽しくない」といった否定的な考えが目立ち、友だちと協力して活動した経験が少ない様子や、自分に自信が持てない様子が浮かび上がった。

「学校が子どもにとって楽しい場所であつてこそ、毎日通いたくなるものです。そのためには、勉強が分かる楽しさだけでなく、子ども同士がより良い関係を築くことが必要だと考えました。『学校は子どもたちのためのもの』という基本に立ち返り、一から学校づくりに取り組み決意をしました」（脇田校長）

取り組みの内容

朝のあいさつを始めて3年後 ようやく子どもに心が通じた

脇田校長は子どもたちが抱える問題の根本には、友だちや教師など人に対する関心の薄さがあるのではないかと感じた。そこで、毎朝、登校時に全員が通る学校近くの信号機付近に立ち、一人ひとりにあいさつを始めた。

「あいさつは、コミュニケーションの第一歩です。身をもって、その大切さを伝えたい

と考えました」（脇田校長）

初めは脇田校長があいさつをしても素通りしてしまう子どもが多かったが、1年目の終わり頃には、声を掛けるとあいさつを返す子どもが徐々に増えていった。3年目になると、脇田校長があいさつをする前に、ほぼ全員が自分から「おはようございます」と言うようになった。活動が定着した後も、脇田校長は同じ場所に立ち、あいさつを続けている。

「時間は掛かりましたが、子どもたちが私の存在を認め、安心感を抱くようになってくれたのだと思います。私は全校児童の顔と名前を覚えていたので、登校時に元氣のない子どもや表情が暗い子どもに気付いた時には、担任に伝えるようにしていました。朝のあいさつは、子どもを理解し、指導するための入り口でもあるのです」（脇田校長）

最低限の決まりを守らせることも徹底した。「教室は散らかさない」「机の上に学習以外の物を出さない」など学習や生活に関する学校全体のルールを細かく設定して教師が共有し、どの学級でも同じ指導を繰り返した。すぐには定着しなかったが、根気強く指導を繰り返すことで、子どもたちに徐々に規範意識が芽生えていったという。

学級会で話し合って決めた活動は 必ず全員で実践する

子どもが安心して学べる環境をつくるため



宗像市立玄海東小学校校長
脇田 哲郎 わきた・てつろう

「学校は子どものためにある」という思いを具体化する。教職員が働きやすい職場をつくる」



宗像市立玄海東小学校
研究主任。6学年担任。「教師子ども、保護者、地域など、あらゆる『かかわり』を大切にしたい教育活動をしたい」

山崎 邦彦 やまざき・くにひこ



宗像市立玄海東小学校
高瀬 博 たかせ・ひろし

児童・生徒支援加配。「地域とのネットワークとチームワークを充実させ、子どもが社会を生き抜く力を育てる」

に、09年度の校内研究では学級活動に取り組んだ。研究主任で6学年担任の山崎邦彦先生は、そのねらいを次のように説明する。

「子ども相互の関係を良くするために、学級活動の時間に皆で話し合って決めたことを実行する体験を多く積ませたいと考えました。それにより、1人では難しいことでも、力を合わせれば出来ると実感させて、学級という集団を高めていくことをねらいました」

学級活動では、1時間で議題を考えて話し合い、翌週の1時間で話し合った結果を実践するという流れを1セットとし、それを月2セット行っている（P.12写真）。

テーマは、「自分たちの生活は自分たちでつくる」という基本方針の下、子どもたちが



写真 6年生の学級会の様子。司会や記録係、黒板係は、輪番制で担当する。話し合いを充実させるために、国語などでも、話し方や聞き方の指導に力を入れている

話し合って決める。学年によって違いがあり、低学年では学級全体が仲良くなるようなレクリエーション活動、中学年では仲間意識が高まるような学級の歌づくりや旗づくり、高学年では学校全体を考えた下級生向けのイベントの開催などが多い。

学級活動では、子どもの主体性を尊重しているが、初めはなかなか話し合いが成立しなかった。そこで、事前に学級会の計画書を作り、話し合いを焦点化するようにした(図)。

「教師も学級の一人として一緒に取り組むというスタンスを保ちながら、一方で話し方や聞き方などを指導しました。一生懸命話し合っても、何も決まらなさと徒労感だけが残ってしまうので、時間は掛かっても何をす

図 6年生 学級会の計画書

ていあん日(ていあん者・・・)		計画委員会
5月24日(木) 曜日 第4回 6の1学級会の計画		07グループ
今度の学級会は5月29日(火) 曜日 5時間目です。 ☆(1年生と学校クイズも)日は6月1日(月) 曜日です。 ☆する場所は(1年教室)です。(昼休み)		
議題(話し合うこと) 学校クイズの問題を決めよう		
司会		副司会
記録係	ノート	黒板
提案理由(話し合うわけ) 1年生が入学して1か月以上がたちますしかし、1年生はまだ学校になれているとは言えません。そこで1年生が学校にならな6年生のみならず学校クイズを作り1年生に出題しよう。問題は15問くらいです。学級会ではこの15問くらいについて1年生に詳しい問題かどうか話し合います。学級会の後、10日間くらい学校クイズの準備期間をとります。学校クイズは1年生が解きますが、準備期間は6年生が教える。1年生に教えます。準備期間に、6年生と1年生が、いっしょに活動し、1年生が楽しめるような問題にしよう。		
時間	会議の計画	気をつけること
15分	1.はじめの言葉(司会)	1.勝手に意見を言わない
25分	2.提案理由の説明(黒板)	2.必ず一回は発表する
15分	3.司会グループのしよう	3.聞き方(あいさつを守り)
	4.話し合い	4.3の形で発表する
23分	柱1 学校クイズの問題について	5.時間内に決める
10分	柱2 計画書の石筆記	6.話し方の受けこえを守る
25分	5.決まらなことの確認(ノート)	
35分	6.ふりかえり	
25分	7.先生の話し	
15分	8.あわりの言葉(副司会)	

6年生の学級会の計画書。司会や記録係などの役割分担、話し合いのテーマ、テーマを決めた理由などと共に、話し合いの進め方、時間配分、気をつけることなども書き込む。この日は、入学したばかりの1年生にクイズを出して学校になじんでもらおうという企画を話し合った
*同校の資料をそのまま掲載

るかを必ず決めて、それを必ず実行するよう
に導いていきました」(山崎先生)

当初は学級活動に消極的な子どもが目立っ
た。それでも、学級活動に負の感情を与えな
いように、教師は必ず良い点を見付け、「今
回はここが良かったよ」などと評価した。ま
た、学級づくりに意識が向くように、一生懸
命に取り組んでいる子どもを必ず褒め、そ
ういう子どもが少しずつ増えるようにした。

**学級のつながりが強まるにつれ
話し合いや実践も充実していく**

当時は学力が低迷していたため、教科指導
を優先した方がよいのではないかという声も
あった。10年度に同校に赴任した当時、6学

年を担任した高瀬博先生は、このように話す。
「初めは学級活動を通して、子どもがどこ
まで変わるのだろうかと思いましたが、こ
回を重ねるにつれ、徐々に学級内につながり
が生まれていきました」

ある子どもは、成績は良いが自己主張が強
く、友だちに対して攻撃的な一面を見せるこ
ともあった。しかし、学級活動で司会などの
全体をまとめる役割を任せられた時に力を発揮
できたことがきっかけとなり、次第に周囲の
ことを考えて行動するようになったという。
そのような姿を目にする中で、教師も学級
活動の大切さを理解していった。

そして、子ども一人ひとりの参加意識が高
まるにつれ、学級活動での話し合いや実践の

学びに向かう土台を築く学級づくり

レベルも高くなっていった。入学時からずっと学級活動を続けてきた、14年度の5年生が企画した「6年生とのお別れ集会」は、キャンドルに火を灯し、その火を在校生が受け継ぐという演出が施された。6年生の思いや伝統を受け継ぐという意味が込められており、参加した全員が感動に包まれたという。

「教師が指導すれば、最初から効率よく準備が出来て、見た目も良い実践になっていたかもしれません。しかし、子どもに学級活動の運営を任せてきたことによって、自分たちで課題を解決する力が付いていったのです。5年生が自らつくり上げたお別れ集会を見て、教師は見守る立場に徹してきて本当に良かったと思いました」（脇田校長）

異学年や地域とのつながりが子どもが変わるきっかけに

他にも、「つながり」の大切さを実感させるさまざまな取り組みを入れる。

異学年の子どもとのつながりを持たせる縦割り活動がその1つだ。毎年、担任が子どもの性格などを基に、1グループを12〜13人とした12の縦割り班を構成。顔合わせ会に始まり、遠足、遊び、旗づくり、給食、掃除など、年間を通して活動に取り組む。すると、活動の時だけでなく、日常的に上級生が下級生に対して優しく、面倒を見るようになった。保護者アンケートでも「6年生になって、下の

学年の子どもの面倒をよく見るようになったのがうれしい」という声が挙がっている。

地域と子どもをつなぐ活動にも力を注ぐ。10年度から学校全体で「鐘崎山笠」という地域の祭りに参加するほか、6年生は地域の人々から盆踊りの指導を受け、5年生は民家に宿泊して漁業や農業などを体験し、4年生は高齢者施設を訪問するなどしている。

当初は信頼関係が築けていなかった地域に、脇田校長をはじめ教師が何度も足を運び、地域行事への参加や学校行事への協力を依頼すると、次第に心を開いてくれるようになった。今では「学校が積極的に入ってくれたことで地域が活性化した」と、感謝の言葉が寄せられるほどになった。

異学年の子どもや地域とつながることにより、子どもの内面に「人のために何かをした」という意識が芽生えている。3年前の東日本大震災では、海が近いために、子どもたちは津波の被害を我がことのように感じた。それが被害地域の人々のために何かしたいという気持ちとなり、募金や寄せ書きを送るといった活動が自然発生的に起こったという。

取り組みの成果

生活面の課題が解消し 学力向上の取り組みに移行

今では、荒れがあった当時を知る人が驚く

ほど、子どもたちは落ち着いている。

「授業中は皆が集中して学習に取り組んでおり、注意をすることは減多にありません。子ども同士の関係にも大きな問題は見られなくなりました」（山崎先生）

かつて地域の人々が学校を訪れても気にとめなかった子どもたちが、今では来客を見かけると自分から元気にあいさつをする。

生活面の課題が解消したことで、12年度からは本格的に学力向上に向けた取り組みをスタートさせた。全教師が全児童を理解できるように、全員態勢で臨む。3年生以上で国語や算数、理科などの教科担任制の導入、チーム・ティーチングや習熟度別授業の実施、学習が遅れている子どもを対象とした放課後の補充学習にも力を入れている。

「補充学習では個々の学習進度に合わせて、必要に応じて学年をさかのぼって指導します。『分かった』『出来た』という喜びを味わわせて自尊心を育み、授業への参加意欲を生み出すことを大切にしています」（高瀬先生）

現在、校内研究のテーマは、1学期は学級活動、2・3学期は教科学習としており、当面はその体制を継続する方針だ。

「未来の日本を担う子どもたちに求められる力を考えると、小学校では『人間力』と『学力』を共に育てる必要があると考えています。学校全体として、この2つをいかに育てるか、研究を通して追究し続けます」（脇田校長）